

龍と海の名を持つ少女のZ/Xの物語

天龍神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少女がゼクスと出会いし、歴史が動いた!!

さあ!! 祝え!! 鬼神と契約し海の龍の少女の生誕である!

目次

第一話 来たれ!! 富士御崎学園!!	1
海龍の幼馴染み&槍のゼクス	3
類は友を呼ぶ	5
五人目の契約者	7
襲撃	9
行くぜ 宇宙へ	11
宇宙 来たー	13
入学式?	15
模擬戦	17

第一話 来たれ!! 富士御崎学園!!

白・赤・青・黒・紫の五世界が進行し、人類が滅亡の危機に反した現象「ブラックポイント」から長い年月が経った現在、ある少女が一体のゼクスに出会った。

「キミが、「ボク」のパートナーになってくれるんだ!! 名前は?」

「なまえ・・・」

それから数カ月後

「うくと、確か、ここで良かったはずんだけど?」

腰まで伸びた夜空のような輝きの黒髪をポニーテールに結び、両目の瞳は右碧左紅だが、れっきとした日本生まれの日本育ちである少女は現在綺麗な砂浜が隣接する富士御崎学園の前にやってきたのであった。

少女は入学の為、送られて来た資料に記された通りに来たのだが住んで居た実家がある場所から離れている田舎に設けられているとはいえ巨大な学園施設が出現したのだから無理もないのだ。

少女はじっとしていても仕方ないので建物の中に入ることになったのだが、

「キャ!?!」

「あ、ごめん、大丈夫?」

「うん、大丈夫」

そこに自分より小柄な青みがかった髪の少女にぶつかってしまい転んでしまったので謝りながらのを差し出して起してあげたのであった。

「ねえ、この学校に招待されたんだね。あ、自己紹介がまだだった、ボクの名前は神蔵海龍（かいと）よろしくね!!」

「各務原あづみ、こっちが」

「リゲルよ。あなたのパートナーゼクスはどこかしら?」

「そうだった! おいで」

少女の名は「神蔵海龍（かみくらかいと）」と名乗り、起こしてあげた少女は「各務原あづみ」と名乗ってそこに彼女のパートナーゼクス

である「リゲル」が現れたのであった。

リゲルは海龍のパートナーゼクスが見当たらないので海龍はゼクスと契約した際手に入れた「カードデバイス」からパートナーゼクスを呼び出したのであった。

「海龍のパートナーゼクスの綾波です」

「まさか、リゲルと同じ、青のゼクス同士なんだ」

「綾波は、こう見えて「赤」のゼクスです」

「え、そうなの？」

リゲルより小柄であるが出てるとこは育っている据えた眼差しを持った赤とグレーの機械っぽい耳に、ライトアイポリー寄りの白い髪の毛のポニーテールの少女型で、へそが見え見えのセーラー服を着て、得物として片刃剣を携えたゼクスが姿を現した。

その名は別名「鬼神」と評され多くの戦果を挙げたとされる存在と謳われる「綾波」の擬人化した存在なのだ。

似た存在であるリゲルと思っていたがあづみだったが、綾波がすぐさま自身は青ではなく赤のゼクスと返答してリゲルとあづみが困惑しながら驚いてしまった。

この出会いがとんでもない運命に翻弄される始まるとは誰もこの時知る由もなかった。

海龍の幼馴染み&槍のゼクス

各務原あづみ&リゲルペアに出会った海龍&綾波はお互いに自己紹介を終えたのであった。

すると遠くから大声で叫びながら海龍達の方へ向かってくる人影が近づいて来た。

「海龍ちゃん!!」

「うそ!!」

「よかった!! 海龍もここに入学の案内来てたんだ!!」

「あゝ」

海龍の知り合いなのだろうリゲルと同じく金色の髪でハイブリッドツインテールに束ねている碧眼の少女が海龍に抱き付き海龍は一旦引きはがしたのであった。

その様子をあづみとリゲルともう一人の少女はどうしようかと思いあづみが恐る恐る聞くことにしたのだ。

「あ、ごめん、わたし、海龍ちゃんの幼馴染みの神成波龍（かなりはりゆう）っていうんだ!! よろしくね!!」

「うん、よろしく、わたしは天ノ川衣奈（そらのかわ えな）、よろしく」

「そうだ、この子がわたしのパートナーゼクスだよ」

周りの視線に気が付いたようで名前は神成波龍という名は体を表すとは真逆に行く本名を名乗り海龍の幼馴染みである事を明かして、あづみと一緒にいた天ノ川衣奈と握手を交わした所で、自身のパートナーゼクスを呼び出すことにし、海龍と同じチョーカー型カードデバイスから召喚したのだ。

「初めまして! 波龍のパートナーゼクスのジャベリンです!! よろしく!! って綾波ちゃん!!」

「あなたも「赤」のゼクスなのかしら?」

「いえ、わたしは「青」のゼクスです!! 綾波ちゃんは分け合って「赤」のゼクスなんですが、「青」の陣営に加わったんです」

「リゲル、そう言うことあるの?」

「わからない。詳しい話はまたにしましょ」

「そうしてくれると、綾波達は助かる・・・」

エメラルドグリーン両目の瞳に、紫色の髪をリボンで束ね、王冠の髪飾りでポニーテールにし、白いタンクトップに紫のタータンチェックのスカートに首に青のスカーフを巻き、蒼いブーツを履いた槍を持った少女が現れた。

綾波と同じくKANSENだが日本艦ではなくイギリス海軍が建造したJ級駆逐艦六番艦「ジャベリン」が人の形を得た姿なのだ。

先ほどの綾波の紹介のこともあったのでリゲルは自己紹介ついでにジャベリンに「赤」のゼクスなのかと質問し、ジャベリンは「青」のゼクスと答えたのであった。

元の世界では綾波は所属した陣営から分け合って離反してきたとジャベリンは言うと、あづみはリゲルにそういうことはあるのかと質問したところリゲルでもわからないと返して時間があるときに話をするといいことで手を打ったのであった。

こうして海龍は幼馴染みと一緒に学園生活を送ることになった。

類は友を呼ぶ

海龍は幼馴染みの神成波龍と再会して、波龍のパートナーゼクスのジャベリンと出会い現在、海龍は入学オリエンテーションが行われるまで待つことになった。

あづみ達とは、後で合流することにして二手に別れることになった。

「ジャベリンが居るということは・・・」

「ラファイーちゃんが居る!!」

「そう言えば、ジャベリンもそうだけど、綾波も変わったゼクスだよね」

「綾波は変わってないです」

二人はお互いのパートナーゼクスが特殊な存在であることに気が付いているが、綾波とジャベリンと同じ存在であるラファイーが居る可能性が出てきたことに期待が高まっていた。

すると、

「ジャベリン、綾波」

「ラファイーちゃん!!」

「もう!! 勝手に言っちゃダメ!! あ、ごめん」

噂をすれば影が差すということわざが存在するが本当にうわさしているところスリーブにサイズが合っていないモコモコしたピンクの上着を着用した白いウサミミカチューシャを装着し、髪はボサボサでツインテールに赤い瞳だがもう既に眠そうな顔で現れた存在こそ、ベソソソ級駆逐艦の一隻でありKAN—SEN「ラファイー」だったのだ。そこにラファイーの契約者であろう茶髪のロングヘアで茶色の瞳の少女が現れたのだ。

「わたし、ラファイーの契約者の神本龍芽（かみもと たつめ）。よろしくね!!」

「よろしく」

「(いちいち)そ、よろしく」

名前は「神本龍芽」というらしく海龍達に自己紹介をしてすぐにお

互いのゼクス同士が仲がいいことで意気投合したのだ。

「龍芽って何か習ってるの？」

「手に出来た、豆がつぶれた感触・・・タダ者ではない」

「一応、剣術を習ってたの、ここの入学勧誘を受けるまではね」

「海龍ちゃんも剣術習ってたよね？」

「そうなの？」

海龍は先ほどの握手の際に龍芽の手から豆がつぶれた感触が伝わってきたことに気が付いたので龍芽に質問すると、龍芽は入学するまで剣術を習っていたことを明かしたのであった。

波龍は海龍も剣術を習っていたことを龍芽に教えていた。

「うん、ボクは憧れの人にもう一度会いたいから」

「憧れの人か」

「もう!! 海龍ちゃんたら!!」

「海龍さんはその人に憧れているんですね」

「がんばれ」

海龍は剣を学んでいる理由がとある人物に会いたいがためだとい
い波龍達から応援されたのだ。

「へえ、オレと一緒にか!!」

「ウエ!?!」

「わりい、オレは神原龍丸(かんばら たつまる)だ。言っておくがこ
れでも女だから!! そうだ、出て来いよ!!」

ちようどそこに毛先が跳ねている長い海色の髪で赤い目をした少
女がやって来たがどうやら海龍とは同じ目的だったようで、名前は神
原龍丸というのであった。

五人目の契約者

海龍は男顔負けらしい雰囲気の神原龍丸に出会い、龍丸自身もある人物に出会うために富士御崎学園にやってきたというのであった。

「龍丸!! 公の場所で!! 恥ずかしくないんですか!!」

「別に構ねえじゃん、おまえは真面目過ぎんだよ!! Z23(ニーミ)」
「Z23」

「その子が龍丸のパートナーゼクスなんだ!!」

「申し遅れました!! わたしのことは遠慮なさらず「Z23」とお呼びください!!」

龍丸の背後から赤・紺・白と三色の軍服姿で髪色はクリーム色ぽい短い髪で碧眼という如何にも真面目らしさが出ている少女が姿を現したのである。

綾波達と同じく「KAN—SEN」と呼ばれる存在でドイツ海軍の駆逐艦「Z23」であった。

Z23ことニーミは海龍達に自己紹介をし、深々とお辞儀をしたのであった。

「(真面目なニーミと豪快な龍丸の正反対だけどいいコンビになりそうだな)」

「まさか、わたし以外にKAN—SENからゼクス化した者が居るなんて」

「ニーミ、落ち込まない」

「そうだけ!!」

海龍は真面目なニーミと豪快な龍丸がこの先いいコンビになるだろうと思っているとニーミは元の世界からの縁なのか綾波達を見て落胆してしまいファイヤーが励ましていたのであった。

「あと一人はボク達の元へ来るんじゃないかな?」

「出来れば、エンタープライズか、ユニコーンが来てくれるといい」

「案外、ベルさんだったりして・・・」

「この際、瑞鶴でも、明石でもいい」

海龍はこの調子で行くと五人一組で行動すると予想したようで、

パートナーゼクス達は元の世界の縁から考えて、空母クラスか、工作艦クラスと予想していたのであった。

綾波は元の世界であったことのある別名「グレイゴースト」と呼ばれたKAN—SEN「エンタープライズ」か「ユニコーン」辺りに来て欲しいと考えており、ジャベリンは通称「ベル」こと「ベルファスト」辺りだと予想し、ラフィーに至っては予想どころか「瑞鶴」だろうが「明石」だろうかと誰でも構わないと言ってなぜかペットボトルのコーラを飲んでいた。

「戦わなければ生き残れませんよ!!」

「え?」

「(師匠から聞いたことあるけど、仮面ライダーだよね)」

「もう!! 恥ずかしいじゃない!!」

「何を言うんですか!!」

「オレ達のチームの色割合、赤が3で青が2ってことになるな」

どこからともなく高らかと大声で間違っても13人の仮面の戦士たちによるバトルロワイアルが始まる事ではないのだが当の本人が楽しそうなのでほっておくことにした海龍だった。

襲撃

海龍達は最後の五人目が誰かと話していると大きな声で「戦わなければ生き残れない」と言ったのはピンクの髪で頭から龍の角が生えた小柄な少女が現れた。

「もう、恥ずかしいじゃない！ あ、わたし龍驤の契約者の龍崎神奈（りゅうざきかな）って言うの！よろしくね」

「こちらこそよろしく」

白銀の長い髪を一本結びにして、瞳の色は海龍と同じくオツドアイだが、右黒左翠と言う珍しい少女が恥ずかしいのか顔を赤くして現れたのであった。

名は龍崎神奈と名乗り海龍達に自己紹介をしたのであった。

パートナーゼクスは日本海軍空母「龍驤」であるのだが、何故か自分の事は空母ではなく、

「軽空母、龍驤と申します！ わたしの存在の大きさを、いずれ見ていただけます！」

「よろしく（龍驤って空母じゃ）」

と言った感じで空母ではなく軽空母と名乗ったのであった。

龍驤本人もどうやら自身の体格を気にしているのだからと海龍達は何も言わないであげたのであった。

「海龍ちゃんも武術習ってるんだ」

「神奈も、武術やってるんだね!!」

「うん、昔、ある人に助けられてね、しばらくして龍驤と契約したの」
「さて、これでオレ達五人そろったけど、とりあえず体育館ほいここへ行けばいいんだよな？」

「入学式始まつちゃう！」

神奈も海龍達と同じくとある人物に会うべく学園にやってきたこととして武術を自ら進んで学んでいることを話して入学式会場へ向かったのであった。

「ねえ、・・・ちゃん、あの子、無事に富士御崎学園に到着したよ」

「そうだね」

「気づいてるんじゃない、あの子のこと」

「いざれ話すことが来たら話す」

「昔から変わんないね、そう言うところ。いこうか」

学園の近くの木々から隠れてある人物二人が会話をしてしばらくしてどこかへ立ち去ったのだが、この二人こそ海龍達が探している存在であることは先の話になりそうであった。

「海か、ボク達にとっては絶好のフィールドだね」

「確かにね」

入学式に出るため廊下を歩いていた海龍達は学園が海に近いことで興奮していたのであった。

その時だった。

「ドゥカン!!」

「隕石!!」

「とりあえず避難するのです!!」

「おゝ」

「ラフィー!! 気が抜けるからやめろ!!」

なんと空から隕石が物凄い数降ってきたのだが、幸いにも海龍達は無傷だったようで、ここは一旦避難を優先するべく別れて行動することになったのであった。

「この先に避難シェルターがあるのです」

「このまま真っ直ぐだね」

全滅を避けるために別れての行動が吉と出たようで問題なく学園の避難シェルター付近へ到着した海龍と綾波はそのまま避難シェルターへ侵入することにしたのであった。

この行動が海龍と綾波の運命を動かすとは誰も知る由もなかった

行くぜ 宇宙へ

いきなりの空からの襲撃だったが海龍と綾波は冷静に考えて別々
に行動することになったが幸いにも避難シエルターらしき建造物を
発見して入り口から侵入して襲撃が収まるまで待つことにした。

「ん？ あづみ達が居るみたい」

「その様です」

シエルター内の通路を歩いて行くところにあづみ達が五芒星を描
くように立っていたのであった。

海龍と綾波はこれから起きるであろうことは大方予想できていた、
いやもう既に知っていたのだから。

「宇宙に行っちゃった」

「宇宙？ 確か、空気がない場所なはずです」

「海龍ちゃん!!」

「波龍!!」

「綾波ちゃんも、無事だったんだ」

「わたし達も無事です」

「ラフィーちゃん!!」

避難シエルターだと思っていた場所はあらかじめ知らされていた
場所で宇宙からの襲撃に備えてゼクスと契約者を転送するための大
掛かりな装置であることに気が付いたのであった。

「(師匠、あの時、言っていたのはこの事だったんですね)」

「ニーミ、どうやら、オレ達も行くとしようぜ!!」

「それには、後、一人足りません!!」

「(ご心配には及びません!! 龍驤、ただいま着任しました!!)」

「お待たせ!!」

「五人そろったけど、確か、上が操作してくれるんだよな？」

海龍は心の中で自分に武術を覚えてくれた師匠に礼を言って、五組
が揃い、いざ出陣と言ったのだが、龍丸が司令部から連絡が来ないこ
とに気が付いたのであった。

「学園長!! また新たなチームが揃いました!! それも、青と赤が共

存している世界のゼクスです」

「そんなはずはないわ!! ゼクスは!!」

「今はそんなことを言い争っている場合ではない!!」

「はい!!」

司令部は驚きを隠せないでいたのだ、それもそのはず本来ゼクスは各色の世界に属している都合上共存ということはないのだが、海龍達のパートナーゼクスはすべて青と赤が共存している世界からやってきたゼクスなのだから。

学園長は言い争っている場合ではないと言ってすぐさま転送するように諭したのであった。

「えくと、キミ達には・・・」

「喋っている時間があるのなら、早く転送してほしいです」

「ちよつと!!」

学園長は通信を飛ばしたが綾波から早く転送してほしいと言われて女性の声で注意されたが、

「一刻の猶予もないんだろ!! 急いでくれ!!」

「転送完了しました!!」

「綾波!! 行くよ!!」

「はい!!」

龍丸はやる気がみなぎっているようで司令部から転送完了のコールが入り海龍達はパートナーゼクスをカード化して戦場と化した宇宙へと向かったのであった。

宇宙 来たー

宇宙からの襲撃者を迎え討つべく一足先に宇宙に行ってしまったあづみ達に加勢するべく生徒会チームより先に海龍達が到着した為に海龍達が宇宙へ転送されたのであった。

「綾波、あいつの心臓部の装甲、リゲルがやったんだらうけど、出来る？」

「もちろん、なのです!!」

「ニミ、一発、デカイの頼むぜ!!」

「了解!!」

「やると、しますか？」

「え？ 波龍ちゃん？」

宇宙空間とはいえどうやら装置のおかげで問題ないらしく、海龍達は驚く様子が無く、冷静に、状況把握して、各自ポジションをあっという間に決めて、加勢に入った。

波龍がいきなり戦闘モードに切り替わったのでパートナーゼクスのジャベリンは引いてしまったが加勢しに行った。

「行きますよ!!」

「ドカッン!!」

「オレ達も混ぜてくれ!!」

「え?!! 誰?」

「ごめん、話は後で、助けに来たよ、あづみ」

「海龍!!」

いきなりその場に居合わせただけのチームで、戦闘がまともにできるのが青のゼクスであり「バトルドレス」と呼ばれる存在であるリゲルという戦力的に壊滅的だが襲撃してきた巨大生物の心臓部の装甲を剥がしたことはあると思いつながら、そこにZ23が放った砲撃の合図で海龍達が乱入したという訳なのだ。

海龍と波龍以外は面識がなかったので驚いたがあづみは海龍達の助太刀にほっとしていたのであった。

「援護よろしく!! 行くよ!! 綾波、波龍」

「もちろん」

「うん!!」

「いってらっしゃい」

短期決戦が好ましいと判断した海龍はパートナーゼクス「綾波」と幼馴染みである波龍とジャベリンは生命体の心臓部を叩くためにメンバーに援護を頼んで接近を試みることにしたのであった。

「格が違いすぎる、あの子達のパートナーゼクスもそうだけど」

「はい、契約者達もかなりの実力です」

「ふむ」

指令室のモニター画面から海龍達の戦いを見ていた一行は空いた口が塞がらないと言った様子だった。

「ぐおおおお!!」

「もう、おそい」

「真剣がほしい」

「ダメだからね!!」

「さあ、次の任務が待ってますよ!!」

「龍驤、軍じゃないの!! ほら!! あづみちゃんが!!」

一斉射撃の弾幕を放ってきたがもう既にあれという間に綾波が持っていた片刃剣で切り裂き、ジャベリンは名前の通りに槍で突き、見事勝利したのであった。

あづみ達はあまりの実力の差に呆然と立ち尽くしていたのであった。

「世羅とオリハルコンティラノが・・・」

「もう、倒しちゃったぞ!! おそいんだよ!! バーカ!!」

「迅速に対応しないといけませんよ!!」

遅れて生徒会チームがやってきたのであった。

入学式？

宇宙からの襲撃事件は海龍達の活躍によって一件落着いたのだが、これからが問題だったようで、学園は閑古鳥が鳴いているのかという感じになってしまったのであった。

「皆さん!! ご入学、おめでとうございます!!」

「これにて、入学式は終わり! 各自、更衣室で着替えた後、シミュレーションルームに集合!」

「おっしや!! 行こうぜ!!」

「あづみ、どうしたの?」

「(海龍達、自覚ないの!!)」

大人数が収容できる場所にたった海龍達を含めても35人しか入学していないのだ。

負傷者を抜いても少なすぎるのだが、海龍達は師匠たちがくれたアドバイスを思い出して前向きに切り替えて綾瀬からオリエンテーションの事について説明され更衣室へ向かうのだが、あづみは海龍達のプロポーションを想像して尚且つ自分の体型を見直して落ち込みながらトボトボと歩いて更衣室へ向かったのであった。

確かに、海龍達は同年代から見ると背は五人共160cm超えて着痩せしているが出てるところは自己主張が激しく引っ込んでるところは問題ないと言った感じなのだが、海龍を初め全く自覚がなかった。

「まさか、自前の訓練の服とは思ってなかったよ」

「いくらなんでも、あづみ達のブルマはないだろ、ゼッテイ、学園長の趣味じゃねえかよ!!」

無事に更衣室に辿り着いたまでは良かったのだがなぜか海龍達の方のバトルスーツが無く、あづみ達に至っては今どき珍しいブルマだったのだ。

海龍達は仕方なく、後で送って置いた荷物から師匠との訓練で着ていた如何にも傭兵が着ていそうな服装で集合場所にやってきたのであった。

「パーティーメンバーがわたし達全員が固定なんだ」

「あれじゃね、めんどくさいんだろ」

「龍丸ちゃんって思ったことをすぐに言っちゃう性格なのね」

「まさか、みんな同じ所に所属してたなんて思ってたかった」

「うん」

集合場所に到着し、パーティーメンバーを編成することになったが、あづみ達と海龍達は固定らしく、戦力差が酷い有様になってしまったあづみ達に対し、海龍達に至っては元が戦うために生まれた存在である「KAN—SEN」であるため戦力差は問題なかったのだが、海龍達がお互い顔を知らないまま同じ場所に所属していたことに驚いていたのであった。

何せ海龍達が着用している訓練服は特務次元武偵「流星の絆」で配布される物だった。

「ボク達の順番はまだか」

「予定が急に変更になるから」

「その場合は翌日だって」

オリエンテーションと言いつつやるのはなんと実戦訓練を兼ねた生徒会メンバーとの模擬戦で海龍達の出番は最後となったので待つことになったのであった。

模擬戦

クラス分けをするべくオリエンテーションを兼ねた生徒会チームとの模擬戦が行われることになり海龍達は分け合って持ってきていたカーゴパンツに軍服という格好だったのだ。

「あづみ達、連携どころか」

「喧嘩ド素人だし」

「いきなり戦えと言われて、出来るわけないしな」

「さて、ボク達も行くよ!!」

大方模擬戦が終わったようで現在予定変更で二日目に入りあづみ達が模擬戦を行ったのだが海龍達よりも戦闘経験が無いのはこの前の実戦で分かっていた通り、司令を出す存在が居ないために連携が取れずに圧倒言う間にあづみ達が敗戦したのであった。

ちなみに生徒会チームは一度負けている。

海龍達の出番が回ってきたので位置に立ち宇宙へ転送されたのであった。

「おまえら!! 世羅達の出番取りやがって!!」

「遅れてやってくる奴が悪い!!」

「あ、質問いいですか?」

《いいわよ》

相手となる生徒会チームは一度会ったオリハルコンテイラノと契約した倉敷世羅が率いているのだが会って早々に以前の手柄を海龍達に取られたことを根に持っていたようで怒り出したのだが、龍丸は遅刻してきた奴が悪いと言い切り、海龍はふと気になっていたことを思い出し綾瀬に質問をすることにした。

「契約者が攻撃に参加するって可能ですか?」

《いいわよ!! できるならやってみなさい》

「わかりました!!」

「海龍、ほどほどにするです」

「なんか、相手が可哀そうになってきちゃった」

「返り討ちにしてやる!!」

今まで師匠から教わった戦闘術があるのでやっていいのかと思っ
ていた海龍達は綾瀬から許可が下りたのでやってみることになり、
パートナーゼクス共に戦う構えをし模擬戦の開始の合図が鳴った。

「波龍、あつちは任せた!!」

「了解!!」

「ウソ!!」

「ニミミ!! 一発でかいの頼む!!」

「わかりました!!」

「銃火器なんて聞いてない!! 卑怯者!!」

「だったら、お望みどおりにして差し上げましょうか?」

模擬戦が始まった瞬間、海龍達のパートナーゼクスがKAN—SE
Nと呼ばれる存在であるために模擬戦どころか実戦経験が豊富で海
龍達の戦闘センスが役に立ちすぎた挙句、まさかの魚雷に砲撃など
による銃火器から始まり、弾幕で視界が遮られたので世羅達が海龍達を
見失うという状況に置かれたことでオリハルコンテイラノの背中に
龍驤が立っていたのであった。

「戦わなければ!! 生き残れませんよ!」

「世羅!!」

「おまえの相手はこのオレだ!!」

「ごくん」

「痛そう・・・」

「ラフィーちゃん、言わなくてもわかるよ」

世羅は恐怖のあまり気絶してしまい、他の生徒会チームメンバーは
龍丸に頭突きを喰らって気絶、海龍達に殴られて気絶して見事海龍達
は勝利したのであった。